# 目　次

はじめに　会長　二神　俊一

**特集：**これまでのあゆみ１９９８年から
神系譜研究会と茫々大連――松山　二神　元信
記憶　二神　守
これまでの歩み　１９９８年から　二神　宏介
二神系譜研究会の露払い役を務めて　二神　康郎
留寿都村にての噺　二神　久蔵
ふるさとへの旅　二神　敏郎
二神島と二神先生　二神　重則
連句　二神　重則
想い出のニューヨーク（１）　二神　俊一
世界に誇れる宝の博物館　溝田　孝一
東倉一族の歴史を訪ねて　東倉　和賢
もう１つの二神島　豊田　渉
二神島の行く末　豊田　渉
史料紹介　豊田掃部助種元之系図（立政寺文書）
日本常民文化研究所客員研究員　萬井　良大

**会則**
**役員名簿**
**編集後記**
**二神系譜研究会への連絡先**

**表紙の写真**

愛媛県伊予郡松前町の塩屋海岸から北西方向約２０kmにある二神島。この左手には由利島、右手には興居島がある。江戸時代に松前浜村漁師の由利島進出の問題があった。

# はじめに

二神系譜研究会　会長　二神俊一

二神系譜研究会は平成 12 年（2000）3 月に設立され、令和元年（2020）に創立 20 周年を迎えました。これまでに会員の皆さまはじめ関係者の方々の格別なるご支援・ご協力を得ながら諸活動を行い、一定の成果を挙げてまいりました。　ここに改めまして会員および関係者の皆様方のご努力に感謝申し上げ、衷心より御礼申し上げます。

さて、コロナ禍が世界中に蔓延し、緊急事態宣言が出されたりして、世界中が人の移動自粛、イベントの開催が中止され、３密（密閉・密集・密接）回避のためあらゆる方策がとられました。ここにきてやっとワクチンが開発され接種が始まることにより、上手くいけばパンデミック（世界的大流行）がおさえられるかもしれないと期待が高まっています。

この間、当会も例にもれず諸活動は中止、各種会合も制限され思うような結果を残せない状況でありました。加えて少子・高齢化の波は否応なく攻めてきています。

以上のような逆境の中ではありますが、私達は地道な活動を通じて地域の歴史・文化の発展、向上に微力ながらも貢献したいと考えております。

今後とも会員、関係者の皆様の温かいご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

２０２１年２月２７

# 特集：これまでのあゆみ 1998 年から

編集部

「二神系譜研究会」は 2000 年（平成１２）3 月 12 日に発足しました。その前年の 2 月 14 日には「二神氏の系譜を研究するための準備会」が北条市（当時）ふるさと館で開かれ、二神氏の系譜研究が組織的に始まりました。

今号では、「これまでのあゆみ 1998 年から」とし、それぞれの思いを書いていただき「特集」という形にしました。なぜ、1998 年にこだわったのかというと、そのころは「二神氏に関するホームページが作られ、情報が全国から集まり大きい動きのあった年だったからです。

1998 年（平成 10）に至るまでの動きは次のとおりです。

●１９９４年（平成６）までの動き

１９８０年（昭和５５）３月二神種昭、二神康郎氏の呼びかけで「東京二神の先祖を語る集い」が開かれるなど、各地、各家譜で調査・研究・行事が行われました。「九州二神会」は、お正月などに集まっていました。

●１９９５年（平成７）

８月１日、二神島で「二神島シンポジウム」が開かれ、神奈川大学の網野善彦教授による「二神島の調査から見えてきたもの」と題する講演があり、二神氏も数人が参加しました。

９月１０日山口県豊浦郡豊田町（現在：下関市豊田町）一ノ瀬で「豊田種長追善供養」が行われ、東京・広島・松山市から二神氏１２名が参加。

●１９９６年（平成８）

１１月に松山市平井町の二神重則氏が「二神氏」のホームページを開設。

●１９９８年（平成１０）

３月２５日、二神英臣氏の長男から「二神氏について調査をしている二神さんが松山にいる」との連絡がありました。

６月２７日には二神重則、二神英臣氏による初懇談で「二神氏の系譜を研究するための準備会起草委員会（仮称）」を作り、具体的な活動を進めていくことになりました。

７月２５日は「二神氏の歴史」をはじめ、各種の史資料を作成する一方でホームページにも「準備会のコーナー」を設定し、全国の二神氏の名簿を作成しました。

８月～１２月にかけて全国から多くの情報がホームページなどを通して寄せられ、それらに対して、史資料など送付しました。

# 二神系譜研究会と茫々大連―松山

理事　　二神　元信

二神系譜研究会が発足してから二十数年になるでしょうか。会長はじめ事務局の方々のその間の活動には頭が下がります。基礎となる調査研究活動、諸々の行事の設定、20号にも近づく会報の発行等々、これほど素晴らしい成果を収めている研究会の例を私は知りません。得られた成果物は紛れもない一級の歴史資料といえるでしょう。

さて、「二神姓」についてですが、私は子どもの頃からあまり好感を持っていませんでした。小学校、中学校、高等学校と入学・進級、転校したりして受け持ちや教科の先生が替わる都度、名簿を片手に出席を取る際に「なんと読むの？」と聞かれた。これはまだ良い方で「にしんさん」と呼ばれるのが通例でした。先生によっては話のタネにします。私はそのたびに「またか！」と辟易しつつ、正しい読み方や説明をさせられ、友達からもからかわれたものです。「神山」でも「神田」でも何でも良いのに、よりによって「二神とは」と、自分でも変な名前だなと思っていました。後年、きっかけは良く憶えていませんが、英臣さんと知り合って二神系譜研究会に入り、歴史を知るに及んでこの評価は変わりました。今ではこの由緒正しい苗字を誇りに思います。以下に「松山について」かすかに記憶に残っている事を記します。

私は昭和15年に関東州大連で生まれ、昭和22年に父祖の地である松山に引揚げ、同年4月小学校1年に入学しました。私達の家族は、短い間でしたが松山の父の実家に約半年暮らした後、兵庫県の立花（尼崎市水堂松本）に移りました。この幼少時代は私にとって最も輝かしいキラキラした時代でもありました。父は四国人特有の「おっとり」した性格で、これも又四国人独特の言い回しと思われますが、「南」を「になみ」と呼んでいました。母は大阪の人間で勝ち気な性格でした。「になみ」についてはその度に父を非難して

いました。父は現地で出征しましたが無事戻ってきました。どのような兵隊さんだったかは知りませんが、隊ではチフスに罹り入院もしたと聞いています。近隣でも復員してきた兵隊さんは幾人かいましたが、多くは発疹チフスに罹っており次々に亡くなっていったようです。この病気で亡くなると、そのとたん体中のシラミがゾロゾロ大挙して這い出してくるのだそうです。

大連でのことは幼いなりに幾つか憶えています。防空頭巾をかぶって幼稚園に通ったこと、ロ助（ソ連兵）の生態や戦車部隊のこと、パーロ（八路軍：中共人民解放軍の前身）のこと、引揚げにまつわること、はては満鉄に勤めたことのある母から後年聞いた、川島芳子や張学良（張作霖の息子）の話など有りますがここでは省略します。

私達家族は昭和 22 年に「信濃丸」で日本へ帰ってきました。この時鮮明に印象に残っているのは、いよいよ博多に上陸となった時、甲板に立った船長さんの「さあ祖国の土を踏みしめて下さい」という言葉です。子供ながらに感激に似た気持ちを覚えたものです。

松山で最も思い出に残っているのは小学校入学式当日の事です。入学式は校庭で親同伴で行われましたが、式が終了したあと親達は一足先に解散となりました。残った生徒はそれぞれの家の所番地を先生に告げて帰ってよろしいとなった。そこでそれぞれ個人やグループはそのことを告げて帰って行きました。私は何を告げれば良いのか分かりませんでした。住所や所番地など聞いたこともありませんでしたし、その概念も持ち合わせていませんでした。生徒は一人減り二人減りついに全員居なくなりました。私はただボーッと立っているだけでした。見かねたのでしょう先生の一人が来て、「あなたのお家はどこ？」と聞きました。私はどこといって答えようが無いので、「いなか（田舎）」と答えました。これは引揚げに際し、かねがね親たちの話に出てくるこの言葉を小耳に挟んでいたので、これだろうと思ったのでした。先生は何度も聞き返してきましたが

答えは同じ、私としてはそれ以外答えようが有りませんでした。ついに先生が何人も集まってきました。結局どう解放してくれたのか憶えていませんが、目に浮かぶのは一面の菜の花畑の中を急ぎ足で歩いている自分の姿です。次の日から私を見かけると先生達は少しはなれた所から私を指さして話をしています。私は何を話題にしているのか知っているし、それ以来随分きまり悪い思いをしたものでした。

「二神系譜研究会」には最初から入会させて頂きましたが、遠隔地（横浜）に居住していることを良いことに何の貢献もせず、まったく済まなく思っています。が、旅行好きでもあり研究会の行事には幾つか参加させてもらいました。二神島や由利島も何度か訪れました。記録の意味でそれらの写真を挙げておきたいと思います。時の経つのは早いものでこれらの情景も在りし日の姿です。二神島はもう何年も訪ねていません。その後、島の人口は？学校は？ミカン畑は？そうして旅宿「ふたがみ荘」は？どうなっているのでしょうか。以前周囲約 10㎞のこの島を一周しようとしたことがありますが、南東部一カ所難所があり断念したことがあります。許されるなら今度はテント持参で訪れてみたく思っています。

写真上から、「北条鹿島祭り」「全国水軍サミット」「二神港のフェリー」「二神島の道路」「ふたがみ荘内部」「由利島の港」「安養寺のビャクシン」

# 記憶

理事　二神　守

私が故二神浩三先生（前会長）にお目にかかったのは、平成１４年頃ではなかったかと思いますが、いろいろと調査をしていただきました。私にとっては１９９８年からの活動は皆無です。浩三先生には大変お世話になりました。心より感謝しております。そのようなわけで、私の「二神系譜」は正統派？ではないので、いささか躊躇いもありますが調査結果や伝聞を取り混ぜて述べてみます。

私の二神家は、明治時代の初期に越智家より分家したと伝えられています。祖父正近は、その当時道後温泉の改築に参画した町議会議員越智通政の弟で道後に住んでいました。(『道後町史』参照。
明治維新後、改革があって「一家の跡取り以外の男子は兵役義務が課せられる」ほか、警察官になるよう勧められたといいます。それを忌避するため、たまたま廃嫡していた二神某の戸籍を買って二神家を興したと聞いたことがあります。浩三先生によれば道後温泉改築の際、二神姓の棟梁が二人いたとのことですが、まったく関係が無かったようです。
したがって私の二神家は、祖父正近が初代ということになります。先年、松山市役所を訪れ戸籍原本などを請求しましたが、肝心要の事項が記された「壬申戸籍」は現在「閲覧禁止」となっていて交付いただけませんでした。
私の父高太郎は明治２５年（1892）道後湯之町で生まれました。当時、高太郎の父正近は町内会の世話役をしていたようですが、明治39年（1906）病に冒され死去します。父が14歳のときでした。母親はまだ若いからと実家に帰されています。残された父は、伯父越智通政の子ですでに成人して香川県の善通寺師団に配属されていた軍人の茂に預けられました。そして父は明治44年（1911）に香川県丸亀中学校を卒業します。
当時、国策として台湾や南米への移民が叫ばれていました。父は台

湾を選び、大正元年（1912）に台湾へ行きます。台湾では、台北税関、台湾銀行などで働きましたが、大正時代末期の世界的大恐慌に見舞われ大正 15 年（1926）に帰国します。昭和 4 年（1929）に再婚し、昭和 6 年（1931）に台湾時代の友人のつてで満州国に渡りました。建築関係、酪農関係の会社で働きましたが、「五族協和・王道楽土」といわれた満州国はわずか 20 年で消滅しました。父は幼少時に「ふるさと道後」を後にして波乱万丈の生涯を遂げ、満州の野に果てま

これまでの歩み　１９９８年から

そして今、私が三代目ということになります。早くしてふるさとを後にした父は、二度と道後を訪れることはありませんでした。私が小さい頃、一緒にお風呂に入ると、こんなわらべ歌を歌ってくれました。ふるさとを懐かしんでいたのでしょう。

♪かぁらす　かぁらす　どこ行く　道後のぶんぶゆく
てぇにもっとるのなーんぞぃ
たいとうごめまごめ　そーれをひーとつくれんかい　やーったらのうなる
のぅなりゃ　つくれ　つーくりゃ手ーがいたい　いーたけりゃ
イタチの　つべくそねーぶれ♪

# 記憶

関西支部　二神宏介

２０２０年はコロナ禍の為に引き籠り人生になってしまいました。８０歳を過ぎ急激に足腰が弱り、１２月には肺に大腸がんの転移が見つかり急速に進行しました。１月に肺がん切除の手術をしましたが、後遺障害で今は苦しんでいます。体力が少し残っている内にと令和３年３月末をもって退会を決意しました。

関西支部の中心の方でした栄三さん他界後、守さんのご指導の下、関西支部会皆様のご協力のおかげで今日まで支部会が継続できました。支部会も高齢化が進み会合も長らく休会の状態です。この文を書いている内にも走馬灯のように１９９８年からの絵柄が思い浮かびます。少しですが写真を残します。

二神水軍衆

全国水軍サミット（愛媛県北条市）　二神水軍の雄姿　2001.4.

支部会（奈良市）2003.6.22

支部会（大阪市・中之島中央公会堂）

支部会

二神島にて　2006.4.24

支部会（奈良市）　種昭さんを講師に迎えて　2003.6.22

関西支部の皆様、松山本部役員の皆様、広島の種昭様、二神会会員の皆様、在会中の楽しい思い出を沢山に有難うございました。感謝の一言です。本誌上において退会の挨拶といたします。

# 二神系譜研究会の露払い役を務めて

理事　　二神　康郎

二神系譜研究会が発足して 21 年になる。発足後、歴代の役員・事務局のご尽力により継続しているのはご同慶の至りだ。留寿都村

私がわが家の系譜に関心を持ち、調査を始めたのは当会発足の年から逆算して 26 年前で、私は会発足の露払い役の一人となった。私は我が家に古びた家系図があることと二神島に二神司郎さんという直系の当主が住んでおられることは知っていたので、二神島に死ぬまでには訪れたいと願いながら果たせないままでいた。父長憲が亡くなった折に忌引き休暇を利用して海路はるばる司郎さんを訪ねて二神島へ行った。　　（筆者：中央）

それは昭和 47 年（1972）秋のことで、二神島を世界的に紹介した米国ワシントン DC に本社のあるナショナル・ジオグラフィック社のライターとカメラマンが来島して二神島を取材した半年後だった。同誌の 26 ページにわたる二神島の記事を今回初めて隅々まで読んだが、島名の由来など島についての面白い紹介記事はあるものの、残念ながら二神氏についての記述はなかった。ただし、墨痕鮮やかに「二神島」と書かれた冒頭の大見出しを二神司郎さんが大書したことは誰かから聞いた。

同誌については二神島初訪問の際、松島旅館を営む徳永フサヨさんに見せてもらった。上京後、早速勤務先のニューヨーク支店の親友に頼んで取り寄せてもらった。最終在庫ということで裏表紙はボロボロになっていたが届けられた。

そのときに島へ持参したわが家の系図の添え書きには、司郎さんの叔父にあたる二神仲次郎（種美）さんが、明治 23 年に私の曽祖父に当たる二世二神茂七に書き与えたことが記されていた。司郎さ

んもそれを見て小生を信頼してくれたようで二神家の祖先についていろいろ説明してくださった。
興味深いのは仲次郎さんが 6 メートル超の巻紙に天児屋根尊を始祖とする毛筆書きの歴代系図を書き与えたのが初代（一世）茂七ではなく、大正 7 年没の二世茂七であったことだ。なぜ、島を出た分家のまた分家の 2 代目に労作を与えたのかは理解できないが、その頃、島の直系二神氏と港山二神氏は親密な関係にあったようだ。
　この時わかったことは恐縮ながら、私の先祖は約 250 年前に豊田姓を名乗って二神本家から分かれ、150 年前にその豊田氏から更に分家して二神姓を名乗って島から出て現在の松山市郊外の港山に定住した。港山に住み着いたのは二神茂七でその長男の二神茂七と区別するため我々は一世茂七と呼んでおり、当人から数えて私は五代目に当たる。この事にちなんで私達は港山二神氏を名乗らせていただいている。ちなみに常務理事の豊田渉さんの家系は二神島で二神本家から豊田姓を名乗り分家したのだそうだ。
二神島初訪問以来、私は毎年夏休みを利用して家族共々二神島を訪ね、松島旅館に泊まり毎回司郎さんにも会って話を聞いた。その過程で島在住の青年団に属していた中田和邦さんや豊田渉さんとも親しくなり、いろいろ教えて頂いた。私は司郎さんが画いた島の「能崎」の風景画を購入させていただいたが、その絵は今も東京の我が家の応接間に飾ってある。
　昭和 55 年（1980）当時、千葉県に住んでいた二神種昭さんから東京国分寺市の拙宅に、突然、電話がかかってきた。あとでわかったことだが彼は私の母校である愛媛県立松山北高等学校の 2 年後輩であった。彼も二神島に関係していて二神氏の家系に興味を持つ人が東京にもいることを知ったらしい。そして「東京中の二神氏を一堂に集めたい」ということだった。
　私は賛成し、彼と協力して電話帳をもとに東京 23 区在住の 33 人の二神氏に葉書を出し、「先祖についての資料を無料で差し上げるゆえ 3 月 23 日午後 1 時に東京駅八重洲口の銀の鈴の下に参集願い

たい」と連絡した。当日二人で「二神」と大書した紙を銀の鈴の下で広げていると、「来るわ、来るわ」、兄弟・子供連れで 20 人ほどの二神さんが集まってきた。早速近くの喫茶店に一行を案内し、簡単な説明の後、先祖についての資料のコピーを配布した。いわく「中島町誌」、「豊田町史」、「日本神話と藤原氏」、「鹿島神宮」の 4 部作から要点を抜粋したもので全て種昭さんが編集したものだ。この資料は皆さんに大変喜ばれ、中には 1 万円を置いていった人もいた。葉書を出したのが 2 3 区に留まらず多摩地区諸都市や首都圏各県を網羅していればもっと多くの二神さんが集まったことだろう。

種昭さんはその後、彼の弟の種弘さんが住んでいる広島市に引っ越され結婚もして二人のお子さんに恵まれた。前々から二神氏の祖先について調査されていたようで、その意欲たるや私の遠く及ぶところではない。

銀の鈴事件も含めて朝日新聞社が発行した「朝日旅の百科」シリーズの「瀬戸内海」編に「二神島探訪」と題して、私が執筆した記事が 4 ページにわたって掲載されたのは昭和 59 年（1984 年）7 月のことだ。当時、私の勤務先の広報室に出入りしていたライターが朝日新聞にも関係していて執筆を依頼された。内容は二神島の概要、歴史、産業、人口、二神系譜などを紹介したもので情報は全て島在住の司郎さん、中田さん、豊田さんから仕入れたものだ。この記事を引き立てるため朝日新聞専属のプロカメラマン牧野さんが、二神島と由利島に出張し 18 枚の見事な写真を添えてくれたことはありがたいことだった。

私達の子は女 3 人だが、三女が結婚する際にお相手が二神姓を名乗ってくれることになり、家系が存続することになった。三女の結婚式にはわが家の家系図を式場に飾ってくれた。その長男は今小学校 4 年生まで成長している。

# 留寿都村にての噺

理事　　二神　久蔵

３年前のちょうど今頃（2月下旬)、スキー仲間と北海道留寿都（ルスツ）のホテルでの夕食後のこと。中国で新型ウイルスがコウモリから見つかったと新聞・テレビで報道されていた。中国の機関「武漢ウイルス研究所」が化学兵器として研究していたものが市中に漏れたということらしい。私は、いくら中国でも世界から非難を浴びることはしないだろうと思って聞いていた。その後、ほかの雑談に移り時間もだいぶん過ぎたのでそれぞれの部屋に引き上げた。

北海道から帰って日が経つに従い、ことの重大さを知った。ウイルス感染者が出たクルーズ船が横浜に入港したことや武漢に在住していた日本人がチャーター機で帰国したが、このとき関西の企業の若者がウイルス検査を拒否して自宅に帰らせてしまうという入国審査官らのいい加減さである。他国なら拘束されてしまう。留寿都でのスキー仲間の予想が当たった気がする。コロナのせいで、年１回のスキー仲間の集まりも去年と今年も中止。共に齢だからもう逢うこともないかもしれない。逢えば「予想が当たった」と言ってやりたいのだが。

中国政府が開発を進めていた化学兵器が何らかのミスで市中に漏れたのか、または故意に実験のためにばら撒いたのかはよく知らない。私は当時、新聞記事などで知っている程度で無関心だったが、今はだんだんと話に引っ込まれている。現地の医者の一人が「未知のウイルスが発生した」（当初 2019 年 12 月末に重症急性呼吸器症候群で未知の感染症として警告）と危険を知らせたら、当局が「許可も無くデマを発表した」と事実をありのままに知らせた市井の医者を犯罪者にした。この医者は武漢の研究所に無関係の人物だったようだが。

武漢ウイルス研究所の関係者なら発生を知っていても、世間には発表しなかったと思う。当時も今も関係者のコメントは一切出てこない。当然に当局は、ウイルスの研究と同時に治療薬も開発を進めていたのではないだろうか。それが開発中に市中・世界に漏れたのでＷＨＯのテドロス事務局長を使いもみ消しに図ったのではないのか。余りにも行動が素早い。ＷＨＯのトップを北京に呼び中国のトップが会談するのは胡散臭い。事務局長も選出においてのバックアップがあったにせよ北京に出かけるとは。ＷＨＯはどの国の介入が及ばない独立した世界の機関であることを忘れてはいないか。本来ならば「世界の人類のために立ち入り検査をしたい、是非協力を」と説得力を発揮するのが役目ではないのか。

米国政府が「中国科学院武漢ウイルス研究所」から新型コロナウイルスが流出したのではという可能性を指摘しＷＨＯに調査団の現地入りを働きかけても中国をかばうばかりで動かず、あげくの果て米国が分担金拠出の引き揚げを持ち出す始末。その後、1 年をかけて証拠隠滅をはかり今年（2021 年 2 月）やっと受け入れを中国に認めさせた。案の定、中国側はＷＨＯを利用して潔白を働きかけ幕引きを図りかけてきた。当局のストーリーに適さない言論は抑え込み、政府批判や真実を知ったり海外メディアに接した者などは、監視下・軟禁・牢獄に放りこみ、政府の検閲された回答しか上がってこない。中国メディアは自国の都合の良いものだけを国内・世界に流している。

中国政府はＷＨＯを利用して新型ウイルスは中国が起源とする見方に反発し、学問的に起源を探るための目的や科学的事実を調べることすらゆがめている。ＷＨＯ調査団の発言の中で中国側の都合の良い紳士的・儀礼発言を利用して世論を誘導する狙いが透けて見える。中国国民は「お上の言うことだ、間違いなし」と信じるだろうが、テドロス事務局長の真価・実力が問われる。

早く新型コロナ騒ぎが治まり、自由に外出や移動ができることを願って、こんな噺になりました。

# ふるさとへの旅

札幌市　　二神　敏郎

令和２年（2020）１１月、松山の道後へ二泊三日の旅をしました。７０年前、父と行った道後温泉本館で朝６時の一番風呂に２日間浸かり昔を懐かしみました。

私たちは昭和２０年３月の大阪大空襲で焼け出され、父の故郷である愛媛松山へ疎開。そして６月に松山大空襲に遭い、二度目の引越し先が三津浜で小学校５年まで生活。アメリカ軍の機銃掃射で穴だらけになった小さな船の姿を今も忘れません。

日がな一日は三津浜の町を歩きました。子どもの頃の思い出では、広い町だと思っていたのにこんなに狭かったのかと思いました。５年間通った三津浜小学校の校門のソテツの木は変わらずにありました。「昔は手漕ぎだったのに」と思いながら三津の渡し船で対岸の港山まで数分の往復旅をしました。三津浜の銀座通りの商店街を歩くと昭和２０年代に映画館２館と芝居小屋もあった当時の賑やかさが嘘のようで、シャッター街に変わっていた。そんな中で楽しみにしていた「鯛めし屋」が休日のため食べられなくて残念。三津駅から松山までは、子どもの頃に車窓から景色を見るのが楽しみだった電車に乗り、昔を堪能した一日でした。

二日目はレンタカーを使い、初めて瀬戸大橋を渡り大島へ行きました。「村上海賊博物館」を見学した後、「潮流体験船」に乗りこんで島めぐりを楽しむ贅沢な一日を過ごしました。思い出の故郷を訪ねることができ、心に残った二泊三日の旅でした。

昔の三津浜港（年代不詳）

昨年は「晴れぬ日は無し辛抱辛抱」でした。今年は「辛抱辛抱　我慢我慢」の

毎日です。あの終戦後の苦労を考えると何とかなるやろのポジティブな気持ち。
皆さんコロナに負けないで今は耐えましょう。二神島と二神先生

# 二神島と二神先生

常任理事　　二神　重則

　二神島との最初の出会いは、私が小学校５年生のときに学校行事で行ったキャンプでした。10 ～ 20 人くらいの参加だったと思います。船が二神港沖に着くと、伝馬船が迎えに来て陸に上がりました。港から歩いて 15 分くらいのところにあった二神小学校がキャンプ地でした。飯盒で米を洗うのに水が少なくて海水で洗い、真水を加えて炊きました。塩味が効いていて大変おいしかったと記憶しています。当時はみんな鞄などはもって無くて、風呂敷などでした。私は父が使っていた野球の帆布のバッグを持って行った思い出があります。
二度目の二神島は高校生のとき部活動で行き民宿へ泊まりました。写真だけが残っています。

二神司郎先生は津田中学校２年生のときの美術の先生でした。当時の美術の時間は午後からの写生が楽しみで、写生はそこそこにして遊びまくっていました。いつだったか先生から「君も海賊だね」と言われました。その後、先生とお会いすることも無かったのですが、二神島で二神系譜研究会の総会と講演会の折に先生のお家を訪問しました。その時、「君にはドジョウをもらった」と言われましたが、そのドジョウのことは記憶にありませんでした。

二神系譜研究会のホームページに会報「海の民ふたがみ」のデータを掲載すべく作業を進めています。会が発足して２０年。すでに亡くなっている方も多く、お世話になったり忘れてはならない人たちがいます。それらの人たちの残した言葉をデジタルで甦らしたいと考えました。「記憶遺産」ですね。亡くなった人のことを思い出すと、その人たちがあの世で喜んでくれると聞いたことがあります。時は流れ、孫・ひ孫の人が名前検索で探り当てることがあるかもと考えました。また、学術的にも公開し残すべきだと思いました。

私は旅が好きです。人々の生きた跡を巡るたび、古い町並みや昔の港町をゆっくり過ごす旅を目指しています。気が向けばスケッチをして句や詩を書きます。二神司郎先生とあのときもっと真面目に絵を習えばよかったと思います。

写真は、津田中学校時代の先生と同級の仲間たちです。先生はカップの左下。かつて愛媛新聞の事業部で先生の画集を作成した烏谷照雄氏（男列の一番左上）、私は右端の帽子なし。

私は現在（コロナ禍の中）尊厳死協会のお手伝いをしていました。先生の絵は父親が丸善石油に勤めていた縁があり所有しています。タンクの向こうにはツバメのマークが描かれていました。

油タンク　1960年　油彩　F6

# 連句

常任理事　　二神　重則

私は数年前から「連句」をしています。連句とは、お仲間（連衆）と五七五の長歌と七七の短句を繋げていく座の文芸です。

松山市の道後地区へ行きますと中世の城跡「湯築城」があります。伊予の守護河野氏の居城でした。２０世紀の終わりころ、この城跡には道後動物園がありました。動物園移転後に、道後温泉の駐車場にするという計画が持ち上がり、中世城跡として残すべきと反対する「湯築城を守る県民の会」が立ち上がりました。当時、私はその会に参加していました。
その頃は今のインターネットは無くてパソコン通信というのがありました。パソコン通信の仲間のお蔭で「インターネットエキスポ」に参加し、湯築城のホームページを作成しました。ホームページの効果か？きっかけで、守る会のことや湯築城が全国規模の話題になりました。現在、城跡として保存されることになったほんの少しお役に立てたかなと思っています。

ご縁というのでしょうか、守る会の人から伊予の守護であった河野氏と二神氏は関係が深いということを教えてもらいながら、湯築城のページの中に「二神さんのコーナー」を作りました。そのことがきっかけとなり、皆さんとお知り合いになり最終的に二神系譜研究会に結び付きました。
湯築城跡の中に「連歌」を行っている様子を再現した建物があります。私たちの二神のご先祖さんたちもきっと戦勝祈願などで、そのような座の中に入り連歌をしていたのであろう

と思われます。ここにも何かご縁というものを感じます。

連歌はのちに俳諧となり、有名な松尾芭蕉や与謝蕪村などが活躍されます。その後、近世は連句として現在に至っています。

連歌・俳諧では最初の五七五を発句と呼び、それが後に俳句として独立します。その発句と俳句は同じ五七五でも、求めるところが違っているからか受けるイメージが違います。私は子規さんの俳句よりも芭蕉や松山の栗田樗堂、福井三国の遊女「歌仙」の俳句が好きです。

武道やお茶や華道によく似ていて日本の伝統・文化でしょうか、先ずは形から入ります。連句には式目という形があります。その辺りはベテランの人たちに教えていただきながら進めます。前の句と場面展開をした次の句、前句が五七五なら七七で、七七なら五七五でその句の中に物語を作ります。前の句Ａと次の句Ｂの世界から異なった世界Ｃに転じて、ＤＥＦと続け、全体で次々と場面展開をしていきます。一般的には３６句繋げたのを歌仙と呼び、芭蕉さんが文芸として完成させたといわれています。最近は忙しいからか１８句とか２０句のものもあります。

出された付句を見ながら、「そうきましたか」とか「なるほど」とか言いながら、その人となりを知るきっかけとなり話の輪が広がります。中世の先の見えない不安定な時代にお殿様や僧侶や庶民が一緒の場を囲み、知らない者同士やお客さんと一緒に和やかなコミュニケーションの手段として発達したのだと思います。芭蕉や一茶が全国のお仲間を訪ねて旅をしています。あの文化のネットワークも驚きです。現在、

人間関係が難しい人やコミュニケーションに障害を持つ人が多くなっていると聞きます。付け句をする遊びなどで相手の心を読み自分の気持ちを入れる。人間関係が希薄になっている現在、流行るような気がします。
盛んな地域とそうでもないところがあります。愛媛県内では松山市以外は殆どありません、お仲間と月に数回数時間、ガヤガヤとしゃべりながら作り上げていく楽しい良い時間を過ごしています。何時の日かベテランの仲間入りをして、友人達と肩の力を抜いてできればいいなと思っています。そのためには今しばらくかかりそうです。
私の旅とお仲間のブログです。
https://blog.goo.ne.jp/rotaugust44

# 想いでのニューヨーク（1）

二神俊一

ニューヨーク（NY）に住んでいた頃のビデオテープを娘が業者に頼んでDVDにダビングしてもらい、先日そのDVDを10枚ほど持ってきてくれた。どれも35年ほど前のもので極めて懐かしかった。以前に倉庫を整理していて段ボールに入っていたビデオテープを見つけたものだ。渡したままになっていて、その存在すら忘れていた。

早速、DVDを再生してみると、懐かしい画像が現れてきた。「掘り出しものの宝や！」。これらは、当時、松山市平井町の実家で留守中の母や、妻の両親にNYの情報を送るために「ニューヨーク便り」をビデオ撮影・録画してせっせと送ったものである。懐かしいNY便りを観たので、本稿ではそのことについて触れてみたい。

昭和60年（1985）当時、金融の自由化、国際化が進展し始めた頃、私の勤務していた伊予銀行でも、取引先の海外進出に応じて、海外展開を模索していた。私は6年間の東京勤務を終えて、本店国際部勤務となり、地元の企業の国際化を支援していた。ある日、取締役会に出席のために本店に来ていた（東京在住の）国際部長（東京銀行出身）から「二神君にはＮＹの三菱銀行ＮＹ支店に長期研修生として行ってもらいたい。2年間と長期だから家族も帯同になるだろう」との話があり、びっくり仰天した。伊予銀行は、その前年にロンドン駐在員事務所を設立していたから、「次はＮＹだな」と感じていた。まあ、長期研修とは名目で実態は伊予銀行のＮＹ拠点開設の準備をしないといけないとのことは暗黙の了解事項であった。

帰宅して家族に伝え、実母、妻、3人の子供は一応に驚いたが、こればっかりは断れるものでもないし、腹を決め、長期研修派遣に応じることとした。高齢の実母を一人実家に残してＮＹに行くことは、さすがに後ろ髪をひかれる思いであった。それまで、松山から大阪支店へ、大阪から東京へ、東京から松山への引っ越しなどで慣れていたが、まさか海外への転居は考えていなかった。もう36年も前のことで、あまり一般的ではなく、慣れてもなかった。日本通

運に電話して船便で送る手配をしてもらった。インボイスに荷物の明細を記載するなど、国内輸送とは異なる手続きが必要であった。長期研修生としてのビザ取得をしないと出国できない。まず私本人が先に渡米し、家族は夏休みに呼び寄せするのが一番軟着陸できるようで､そのシナリオで進めた。当時は海外への転居を伴う派遣(赴任）のノウハウはまだ確立されていなくて、個別に対応していくしかなかった。学校の手続き，荷物の搬出などは妻に任せ、私は仕事に専念しながら準備をした。現在ならネットで何もかも調べられるが当時は、電話・ＦＡＸしかない。たまたま同級生が三菱銀行に勤務していたので三菱銀行のＮＹ支店の状況を教えてもらったりした。当時はそんなにコンプライアンスがやかましくなくてＮＹ支店の職員名簿の写しを見せてもらい、都市銀行と地方銀行の違いは認識していたがその職員の数・規模に驚くばかりであった。

当初は 3 月頃出発の予定であったが、ビザの取得が大幅に遅れてしまい、バタバタと出国準備をして、大きいスーツケースと機内持ち込みの鞄をかかえて昭和 60 年（ 1 985）5 月 30 日、成田発 JAL006 便に機上の人となった。フライトは凡そ 13 時間で、NY ケネディ空港へ到着。時差ボケとこれからの NY での生活への期待感と不安感で頭は一杯でぼーッとしていた。

ケネディ空港からマンハッタンへ向かうタクシーから、かの有名な摩天楼が見え隠れしダウンタウンのツインタワーなど、あそこらがNYの金融の中心地だなと思い、高揚感で溢れていた。タクシーは南部なまりの分かりにくい言葉で荒っぽい運転ではあったが何とか目的地の安アパートメントホテルに到着。当時は現在より治安が良くないNYの中では、どこのホテルも厳重なセキュリティがされてあった。
言葉、文化、習慣、生活様式が一変し、全てのことが新鮮で珍しく、NYでのエキサイティングでエネルギッシュな街に圧倒されそうだった。三菱銀行NY支店は世界貿易センタービル（One World Trade Center）の85階にあり、自由の女神象が眼下に眺められる高層階で都市銀行の国際化の最先端を担っていた。当時日本からの派遣行員が約50名、NYで採用のアメリカ人などが約150名、合計200名の大所帯であった。

注：（2001年9月11日アメリカ同時多発テロ事件でこのビルは爆破された。今年は事故から丁度20年目）
私はローンセクションで机、電話を貸してもらって、ファックスも自由に使わせて頂いた。私より先に研修生として来ていたのは八十二、広島、群馬、　百十四、　福井などの地方銀行であった。それぞれ、為替・融資などのセクションで研修を受けていた。三菱銀行では午前10時頃15分くらいのコーヒータイムがあり、食堂で自由にアメリカンコーヒーを飲みながら雑談できるところがあり、自販機もあったので、自然と研修生が集まって情報交換をする機会にめぐまれた。そこのエリアは当然日本語で話もでき私にとっては、かっこうのオアシスであった。
とりあえず、地理を覚えることから始め、住居探し、電話の申込、車の購入、ライセンス取得などを短時間でやらなければならなかった。住居の関しては、単身ならマンハッタン内のアパートでもよかったが、いずれ家族も呼び寄せるから治安がよくて学校の利便性など考えて郊外の家を捜すことにした。いろいろと情報収集して、ブローカーを探して電話をしてアポを取ってもらった。
　郊外電車は初めてで、ミッドタウンの４２nd Streetにあるグランドセントラル駅からHartsdale駅まで約３０分あまり。駅の構内は薄暗く列車も薄汚れていて、出発のベルの音も聞こえなくて、音もなく発車し非常に不安であった。途中マンハッタンの北部ハーレム地区を通過し、アフリカ系アメリカ人が多く住んでいる地域を車窓から見ながら進み、しばらくすると電車は両脇が緑の林の中を北上し、森の中にアメリカンスタイルの住居が点々として、これまでマンハッタンのビル群の中にいただけに、その別天地のような光景に目を見張った。Hartsdaleの駅で降りてそれらしきブローカー（チャイニーズ系）だったので直ぐわかり小型車で物件を案内してもらった。

駅からら徒歩で通え、小学校などが近くにあり、通常の買い物も便利なところなどを勘案してもらい４，５軒見てまわったが、家賃もピンキリだった。早速、国際部経由人事部へ伺い書を三菱のファックスを借りて送る。この時も他の地方銀行の研修生のそれぞれの家賃を教えてもらい、参考価格とさせてもらった。当時、ロンドンの家賃も高かったがNYも結構な値段で人事部を説得するのに苦労した。平均２千ドルくらいが相場だったが、初めは研修生でもあり、比較的手ごろな１３００ドルの物件にさせてもらった。

ニューヨーク郊外の自宅（駅から徒歩で１０分ほど）
１２Wilson street Hantsdale
車はGMのBUICK　Lesabre

通勤は電車でするにしても、車社会のアメリカでは足としての車は必須。当初は中古で我慢して慣れたら新車にと思い中古車を探すことにした。マンハッタン内にある非営利の民間団体「日本クラブ」の掲示板に「車売ります、買います」という情報を得た。帰国が決まった駐在員が乗っていた車を手放すというメモを見つけて早速電話した。日本人同士で何となく安心感があり、指定された場所へ行ってみて驚いた。GM社のビュイックでまるで戦車のような大きさに見えた。相場感は無かったが5千ドルを小切手で支払い、マンハッタンから郊外の家まで地理もまだよくわかってない頃、一人で運転するのはかなり勇気がいった。初めて走るフリーウエイ（まだ現地のNYドライバーライセンスを取っていなくて、日本の国際免許証で運転した）をもたもたしていると周りの車がビュンビュン追い越して行ってくれたので助かった。確かエンジンは4500ccくらいあり、ガソリンを撒いて走っている感じであった。もちろんナビもない時代でフリーウエイの出口の番号さえ覚えておけばよかった。その後、そのアメリカ車は故障が多く、ギブアップして、結局新しいアメリカ車をリースすることとなった。

家を見つけて車を手に入れたら次は家具を調達しないといけない。家具付きの家と家具なしの家があり、初めは家具なしの家であったので、家具を買うかリースにするか決めないといけない。幸い近所に家具専門店があり、必要最低限のダイニングテーブル、椅子、ベッド、ソファーなどをリースすることにした。

次は電話の申込。ＮＹテレフォンに電話したけれど、早口でまくしたてられて弱ったが何とか工事に来てくれる日を確認して、その日は休みをもらって家で待機することにした。電話で来る時間を聞いても、「時間までは指定できない」の一点張りで兎に角待つしかなかった。昼頃に近所へ食料を買

いに出かけた時間だけ家を空けていたが結局その日、工事の人はきてくれなかった。翌日NYテレフォンへクレームしたが埒があかない。後日、電話機を買ってきて差し込んでみたら通じたので、留守中に家主に連絡して工事をしてもらったのか、昼頃出かけた短時間に来て工事をしたのか、よくわからないままであった。

次は学校を調べなければならない。NY日本人学校があったが初等部5年生から中等部3年までで、距離も遠方であったので、子供たちには最初から現地校に行ってもらうことにしていた。この地区の小学校、幼稚園を調べてみた。平日は調査できないので、休日を利用して学校へ行ってみても閉まっていた。まあ、学校は家族が来てからのことにした。そうこうしているうちに家族を呼び寄せる日がきた。8月中旬に松山からNYへ船便で荷物を送り、家族は9月27日に成田空港を出発、翌日にJAL006便はJFK空港へ着いた。空港の送迎はリムジンがよく使われる。前月8月に日本航空機123便が御巣鷹山に墜落して520名が亡くなった事故のすぐ後だけに、4か月ぶりに合わした顔は不安と緊張で笑顔がなかった。空港からリムジンで郊外の自宅までスムーズに運んでくれて楽であった。

妻、長男（小学校5年生）長女（3年生）次女（幼稚園年中）の5年間のNY生活の始まりであった。10月中旬になって少し慣れた頃、近くの学校へ子供たちを連れて行き編入手続きをした。NY郊外の公立学校は比較的治安もよく、移民の国だけあって異文化に寛容であり、すんなりと受け入れてくれた。しかし、子供たちは英語がわからず慣れるまでは大変だったようだ。1クラスに2名の先生がつき英語が第2外国語圏の子弟に対し、能力に応じた指導をしてくれて軟着陸ができたようである。1年くらいしたら、大分理解できるようになり、耳から毎日シャワーのように浴びる英語が語学の上

達にはふさわしいのだということがわかった。また、算数、数学は日本での授業が進んでいたので、算数、数学に関しては日本人の子弟は常に「優」をもらっていた。先生は良いところを見つけては褒め上手で、教育の原点を垣間見ることができた。

当時、マンハッタンへ通勤可能な距離に住んでいる所謂日本人は約5万人くらいといわれていた。駐在員の子弟は大半がアメリカの現地校に通い、土曜日はNY日本語補習校（写真参照）に通っていた。NY補修授業校は1962年ＮＹ日本人教育審議会により設立された日本語教室が、1975年のＮＹ州教育局により学校法人として認可され、ＮＹ補習授業校となったもので、現地校の校舎を借りて週１回、土曜日に開校されていて、日頃現地校へ通っている子供たちのための日本語の補習をしてくれていた。

そこへは、親が車で送迎をするのが役目であった。（次号へ続く）

（2021/3/25）

# 「世界に誇れる宝の博物館」

館長　溝田孝一

写真は阿修羅像、光明皇后に似せて制作。
鎌足、鏡王女の孫。当博物館所蔵。

私の先祖の博物館が完成しましたのは、二神系譜研究会の皆様のご協力が有り、「景浦勉先生の二神文書」、「福川一徳先生の伊予二神氏と二神文書」、「田中鑛蔵先生の豊田町文化財史料編纂委員会長の資料」、そして「東京大学史料編纂所の史料」などのご提供がありましたので、完成することが出来ました。紙面をお借りして心より厚く御礼申し上げます。

この博物館は「史徴墨寶」や先祖からの「歴代武士の引き継ぎ書状」、そして「家族が収集した書状」や「宝石など」をBaseに展示しています。

所蔵作品の中には米国に渡り、名門コロンビア大学で研究のお手伝いをさせて頂いた「新古今和歌集」があります。世界最高水準のMRI診断、そして研究終了後、主要な美術館で展示、ヨーロッパにも渡り帰国しました。又、伊達藩に納めた日本外史、江馬細香筆も同様に米国に渡り、主要な美術館で展示されました。

その他、当博物館所蔵の伊達政宗書状6書状が「新発見書状」でした。仙台市博物館の学芸員の先生方がびっくりされ当博物館を訪れ、原本を確認、調査後、せんだい市史、特別号に記載発行されました。

「世界に誇れる宝」は何よりも初代鎌足、鏡王女から52代に亘る系譜を作成出来た事です。この系譜は2002年4月に作成、国会図書館、

八王子市図書館、鎌足神社に納めました。近年 Net で Twitter（完成）、Facebook（修正進行中）は私が担当、数百点を超える所蔵書状が御先祖様のどの時代の方なのか当てはめています。例えば、「通範」の時代は織田信長、武田信玄、上杉謙信などの書状を現代語訳付で添付、「通種」、「家種」の時代は豊臣秀吉、徳川家康書状を同様に添付、「種末」の時代は伊達政宗などを添付して完成させています。
次に「世界に誇れる宝」の系譜ですが、存続が危ぶまれる危機が幾つか有りましたので、ご紹介します。最大の危機の 1 番目は、鎌足 15 代目「忠実」道長 4 世孫と、その子「忠通」道長 5 世孫です。「忠実」の父は正二位大納言「忠家」道長 3 世孫、平安京で「道長」の子孫として牢乎たる地位を築いていました。その子、四男「忠実」は未だ成人前、地位も散位、従五位下これから出世街道の道を歩む事になるであろう時に突然天国に召されました。その遺児、「忠通」は未だ乳飲児です。一族は「忠通」を養子に出すことなりました。養父は鎌足 15 代目「長房」道隆 4 代孫 1030 ～ 1099、正三位太宰大弐参議、大蔵卿のところです。ところが養父も高齢で、「忠通」が 4 歳～ 5 歳の時に天国に召されました。実父、養父の顔ははっきり覚えていません。この様な状態になった時に誰が助けてくれるでしょうか。因みに「忠通」との従兄弟は中世和歌の先導者「俊成」、「定家」の父です。「忠通」は武士となって平安京を去る時が来ます。行き先は長門豊浦郡豊田町大字殿敷一ノ瀬、姓は藤原姓豊田氏、名を「輔長」と改め、長門大掾の地位として赴任します。
第 2 番目に危ぶまれたのは鎌足 3 代目「房前」の時代です。西暦 735 年天然痘が異国人によって持ち込まれ太宰府管内で蔓延、やがて平城京、そして日本全土に、738 年 1 月終息するまで、当時の日本の総人口の 25% ～ 35%、100 万人以上の人が感染して死亡しました。平城京でも国政を担っていた貴族 9 人中 7 人が天然痘で死亡。鎌足 3 代目、兄弟四人全員、長男武智麻呂（南家）、次男房前（北家）、三男宇合（式家）、四男麻呂（京家）が天然痘に感染して死亡しました。三女の光明皇后は救われました。

第 3 番目の危機は鎌足二代目「不比等」です。父「鎌足」が 55 歳の時、落馬により死亡、次男「不比等」は未だ 11 歳、右も左も分からない子供でした。その子供を前にして死を覚悟する事は無念であったと思う。「不比等」は側近によって育てられ、673 年に下級官人、草壁皇子に仕え、689 年に判事となる。そして文武天皇の夫人に「不比等」の長女宮子が嫁ぎ、平城京の最高幹部、正二位右大臣となる。
世界に誇れる宝の博物館は「溝田孝一」で検索すれば入場できます。興味のある方はご覧になって下さい。

# 東倉一族の歴史を訪ねて

東倉　和賢

今は、日本中コロナで騒いでいますが、皆様いかがお過ごしですか、私の姓は、東倉です。

何故、二神系譜研究会員になったかと云いますと、父方の先祖二神家種が江戸時代初期に二神島へ帰農したとされた折、種長・種興・種末の兄弟がいました。種長が二神家宗家（司郎家）で種興・種末が分家。わが家は種興の子孫です。祖父は二神滝三郎で、子供は兄弟２人でした。長男･種則は江田島海軍兵学校の砲術教官で、次男･二三人は宮大工になっていました。東倉家の屋敷を建てるときに父が大工の一人として来ていました。その時、母方の祖父・悦太郎が父・二三人を気に入り、母が一人娘だったので養子に迎えたそうです。

母方は今治の大三島神社系で家紋は「八角縮三文字」。豊臣秀吉の四国攻めで敗れて山口県屋代島に逃げましたが、その後、土佐の山奥で大庄屋になり伊予松山との境の「橘番所」を任されました。「東倉番所」とも言われて明治に入る前まで在ったことを、小説『竜馬がゆく』で司馬遼太郎が述べています。分家筋の母方は津吉村に移り地主でありながら米の販売を手広く行い、本家や高知と大洲方面に商売をし、馬七頭ほどにお米を載せ奉公人と一緒に徒歩で廻りました。途中で追い剥ぎに遭うので、七連発のピストルを持参していたそうです。このピストルは日清戦争の時に政府に寄贈したとか。この頃は坂本龍馬の様に、時代の流れで持参するのが流行したのかもしれません。

祖母トキは産婆をしていて忙しいので自転車を買い、松山で最初に「女乗りの自転車」に乗った人とのこと。祖母の実家は松山津吉村庄屋の森家で、江戸時代は徳川村でしたが後に津吉村になりました。神社は「徳川神社（徳威社、徳威徳川神社）」で、遠い親戚筋に当たります。元は森家の上の徳威の森（御所家ヶ谷）にありましたが、火事で焼失して現在の場所に移転しました。古代大山積神社

の初めての８分社の１つだそうです、神紋は「八角縮三文字」です。古代の古墳は徳威森や若宮山にあり若宮は我が家の蜜柑の果樹園になっていました。横に池があり円噴か前方後円墳かの判断ができません。

裏山の「尉の城（じょうのしろ：３８３m）」は鎌倉時代、久谷地区の地頭だった土岐氏の本城で津吉城、徳川城とも呼ばれました。簡単な石垣と屋根付きの休憩所のような建物と奥には簡単な祠がありました。居館は松山市荏原町の東方にある「新張城」で、土岐氏の伊予の地様で「光源寺跡」に伝土岐光定（土岐氏中祖三代）の墓もあります。現在、私は岐阜県に住んで居ますが美濃と伊予の国とが非常に深い関係であることがわかり調べているうちに地元の歴史研究会に入っていました。

折敷に縮三文字

徳威徳川神社 小千益躬（おちのますみ）

和銅２年（706）浮穴郡徳川村　徳川宮置く

光源寺跡　伝土岐光定の墓

（保存地区で手入れ禁止）

先祖二神家のエピソードとして母から聞いているのは、誰だかは分りませんが「海賊大将で身長六尺三寸、力は米俵十俵を三角形に積んだ、真ん中の一俵を抜き差しできる怪力の人で、足には一斗樽の下駄で、支那の町を歩いた豪傑」がいたそうです。その他に4点あって、「天照大御神の掛け軸」は、二神系譜研究会で調べて頂き、明治天皇の父孝明天皇が勅願寺と認めた、岡山県にある黒住教3世の字で伊勢神宮と親しい関係だそうです。次の物は「系図の電子化」、続いては二神島の城ノ山のビシャクシン（愛媛県天然記念物）を指定される前に切って作った「城山産のお盆」です、丸盆角盆で1組になっていましたが、野良で丸盆が焼けてしまい、角盆は手元にあります。今でも布で手入れをすると、香しい匂いが出ます。高級なお茶を出すには、最適なお盆です。最後の物は、「海松の煙管掛け」です。海松（うみまつ）は海中で成長する松だそうで、千石舟に乗るときに腰に付けた物と伝えられています。

日本神道黒住派3世の文字

二神・東倉系図の電子化

城の山ビシャクシンで製作したお盆　海松の煙管掛

平成３０年（2018）４月１日に下関市豊北町にある田耕神社（たすきじんじゃ）の「浜出祭」に行ってきました、その３年前の平成２７年（2015）4 月 16 日山口県の名所と豊田町の豊田一族の遺跡を家内と見に行きました。足を延ばして豊北町の田耕神社へ 豊田一族の宮司さんだったらいいなと思いながら会いに行きました。坂口宮司によると、残念ながら山口県下の神社庁が配属を決めるそうで、豊田一族ではありませんでした。浜出祭は７年に一度行われ、馬を集めるのが一番大変で九州からの馬が一番多く予算が大変だそうです。平成３０年（2018）の案内状を頂いたので、少額でしたが寄付金をして出かけました。行列の出発の時、宮司に声をお掛けすると覚えておられ「遠いところを御苦労さまです」との挨拶を頂きました。朝８時に出発して途中で休憩をはさみ、午後３時式場に到着。山側の田耕神社から海側の土井ケ浜にある蛭子社まで、古式ゆかしい時代装束をまとったご神幸をはじめ、鰤の献上奉納、男女和合の式も姫と少年が１０ｍ四方を一周して終わり、シンプルそのものでした。会場の囲いの中で着替えその他の作業を行う為大変な行事です。この浜出祭は山口県指定無形文化財に指定されています。薄暗くなりそうなので途中で、ホテルに帰りました。大変でしたが良い思い出になりました。

平成30 年（2018）
「浜出祭」の武者行列

行事会場
神輿と行列から袴に着替え大変

行列と馬２０頭
颯爽と乗馬の宮司

平　成27 年（2015）
宮司と私

田耕神社

豊田一族の知行寺跡

# もう１つの二神島

豊田　渉

日本国内に二神島がもう１つ長崎県にあることがわかり、問い合わせをしたのは平成 11 年（1999）3 月のことで、長崎県北松浦郡大島村教育委員会（現在：平戸市、平成 17 年に合併）から返事があった。

二神島（大二神）は、平戸市の的山大島（あづちおおしま）の北約 10km にあり、面積 0.13 平方㎞、標高 91m。島の西方約 3.2km には小二神がある。古くから「二神神社」がまつられ、豊臣秀吉が朝鮮出兵の時に祈願したと伝わっている。大正 7 年（1918）に二神島灯台が設置されて以来、壱岐水道を航行する船はこの灯台を目印にしている。かつては灯台職員などが常駐。昭和 30 年（1955）の国勢調査では 6 人いたが、昭和 34 年（1959）に灯台が無人化され無人島になった。

旧郷土誌によると真偽は不明だが次のようにある。

> 大島照子
>
> 照子姫は大島民部澄月の子照定（勘右衛門）の室なり。天文十年大島神社市後を勤務す。文禄元年大閣秀吉朝鮮を征するや敵国降伏の御祈祷行可致旨を以て二神島にて右祈祷を執行す。されば大閣御帰陣の折報奨として高百石並びに日の丸御印、宅地反別五反五畝七歩下賜せらる。御墨付寫如左
>
> 附　二神島は大閣朝鮮征伐の折、一時軍馬を放ち休ませり

また、大島村漁業協同組合資料によると、藩政のころ生月村の石工神田某なる者藩主松浦家に功あり。領主より二神島を拝領されその遺族神田小二郎氏の所有となった。明治 20 年 12 月 2 日に神田小二郎氏は神浦 126 番地の井元イヨ氏に売却。さらに明治 44 年に田平日出柄氏に譲渡。昭和 2 年 8 月 30 日大島漁業組合が 5 千 5 百円で買収。宅地 70 坪、3 凛 2 町 1 反 22 歩、原野 9 町 3 反 1 畝 13 歩。太平洋戦争中は軍隊が駐屯し、軍事施設跡もその面影をとどめている。

長崎県二神島

ずっと前から気になっていた「もう 1 つの二神島」のことを意識した後。長崎の壱岐島へ行くときの船で進行方向の左側に座り、確認したことを思い出す。同じ名前の二神島は、現在無人島であり大小二つで二神島というらしい。訪ねることはなかなか難しいだろうが、機会があれば行ってみたいものだ。

# 二神島の行く末

豊田　渉

私の生まれ育った二神島は忽那諸島の中でも急激に人口が減ってかなりの高齢化になっているように感じる。現在、島に住んでいなくて、島を捨ててしまった？ような私にとってコメントをすることには抵抗があるが、ふるさとのことは気になるのである。

半世紀近く前の昭和 50 年（1975）4 月、二神島の人口は 579 人・・0~19 歳 145 人（25%）、20~64 歳 332 人（57%）、65 歳以上 102 人（18%）だった。その 40 年後の平成 27 年（2015）4 月の人口は 154 人・・0~19 歳 3 人（2%）、20~64 歳 30 人（19%）、65 歳以上 121 人（79%）になった。令和 3 年（2021）3 月現在、さらに減り 100 人をゆうに切っている状況にある。

二神島の人口比較

| | 昭和50年10月＝1975 | | | 平成27年1月＝2015 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 0～4 | 7 | 3 | 10 | | | 0 |
| 5～9 | 9 | 15 | 24 | 1 | 1 | 2 |
| 10～14 | 27 | 31 | 58 | | 1 | 1 |
| 15～19 | 29 | 24 | 53 | | | 0 |
| 20～24 | 9 | 13 | 22 | | | 0 |
| 25～29 | 11 | 8 | 19 | 1 | | 1 |
| 30～34 | 6 | 9 | 15 | 1 | | 1 |
| 35～39 | 19 | 22 | 41 | | 2 | 2 |
| 40～44 | 33 | 28 | 61 | 3 | | 3 |
| 45～49 | 26 | 28 | 54 | 1 | 1 | 2 |
| 50～54 | 26 | 24 | 50 | 3 | | 3 |
| 55～59 | 16 | 21 | 37 | 4 | 3 | 7 |
| 60～64 | 14 | 19 | 33 | 5 | 6 | 11 |
| 65～69 | 17 | 15 | 32 | 8 | 4 | 12 |
| 70～74 | 14 | 18 | 32 | 6 | 14 | 20 |
| 75～79 | 11 | 11 | 22 | 17 | 16 | 33 |
| 80～84 | 9 | 3 | 12 | 15 | 17 | 32 |
| 85～89 | 2 | 1 | 3 | 8 | 13 | 21 |
| 90～94 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 2 |
| 95～99 | | | | | 1 | 1 |
| 合計 | 286 | 293 | 579 | 74 | 80 | 154 |

| | |
|---|---|
| 0～19歳　25．0% | 0～19歳　2．0% |
| 20～64歳　57．4% | 20～64歳　19．5% |
| 65歳以上　17．6% | 65歳以上　78．5% |

月に数回程度だが島に帰るたびに、訃報や入院して島を離れていることなどを耳にする。船を降りて桟橋から我が家に辿り着く間、誰一人会うことのないこともある。寂しいが何もかもが「無い無いづくし」の場所になりつつある。医者はおらず中島から週 2 回の出張診療がある。数軒あった商店はなくなり、週 1 回島外から移動販売車がやって来る。僧侶も神主もいなくて必要なときに島外から来てくれる。小学校は平成 21 年（2009）4 月から休校になって、ゆうに 10 年が過ぎた。農協は令和 3 年 4 月からは週 3 日しか開かないようになるという。などなど、このような状況のふるさとであるが、これが現実であることには違いない。

全国の小さな島や山間部などでは同じようなところが多々あるだ

ろう。賑わっていた頃、人々が貧しいながらも笑いながら苦しみながら悲しみにこらえながら過ごしていた日々のことは、当時を生きた人たちでないと分かるはずはない。島が山間部などが主役だった時代は遠くになり、やがて忘れられていくのだろうか。ふと将来的には何かが起こり、再び島が活気づいていくことがあるかもしれないという思いを抱くことがある。異常なまでに過密になり過ぎた世界の反面で過疎になりながらも頑張っている人たちが生きる世界がある。これからどのように世の中が変わっていくのか、とことんまで確認することは難しそうだが、現実を見ながらふるさとを思う気持ちはなくしたくないと思う。

# 【史料紹介】豊田掃部助種元之系図（立政寺文書）

日本常民文化研究所客員研究員　萬井良大

今回、紹介する史料は岐阜市西荘（にしのしょう）にある浄土宗の古刹、立政寺（りゅうしょうじ）に伝わる「豊田掃部助種元之系図」である。この史料に注目したのは、豊田二神氏の通字である「種」が諱に入っていること、また二神司郎家に伝わる建武二年（一三三五）八月三日足利尊氏袖判下文写[1]における豊田種治との関連性が、若干ながら窺えるためである。このように二神氏の系譜を考察する上で多少なりとも参考になる史料であると考え、ここに当系図を紹介することとした。

当系図を所蔵する立政寺は、山号を亀甲山といい、文和三年（一三五四）に智通上人を開山として美濃国厚見郡平田西庄（にしのしょう）と同郡市橋庄の境界上に勅願寺として創建された。織田信長を頼った足利義昭が、上洛するまでのあいだ滞在した御座所としても有名であり、また関ヶ原の戦いにおいて徳川家康が立ち寄ったとも伝えられている。このとき家康に大柿を差し出したところ、家康は「大垣」を手に入れたと喜んだという[2]。

さて『立政寺文書』には、立政寺寺開祖智通に宛てた豊田種元およびその父、豊田光泰（光易）の寄進状が残されており、そのうちの一部は今回、翻刻した「豊田掃部助種元之系図」のなかに書き写されている3。これらの原本の写真は見ていないが、系図に写されたものの筆跡などから、忠実に模写されたもののようである。影写されたものかもしれない。

---

1.『二神司朗家文書 中世文書・系図編』（神奈川大学日本常民文化研究所編、神奈川大学日本常民文化研究所、二〇一六年）の「参考史料」

2.古事類苑 宗教部』洋装四巻、六八一頁、「宗教部六十四 仏教六十四 立政寺」

3.二人の寄進状は本系図に転載されているもの以外にも数通残されている。これらは『岐阜県史 史料編 古代・中世一』（岐阜県編、岐阜県、一九六九年）所収の『立政寺文書』で見ることができる。また同文書群のなかには、本系図において種元の子息小野種一やその子孫の寄進状なども見える。

この豊田光泰・種元が越前国に住していたことが、これらの寄進状から明らかであるが、越前国と言えば、前述の建武二年八月三日足利尊氏袖判下文写を想起させる。なぜなら同史料では足利尊氏が豊田修理亮種治に越前国主計保に所領を宛行っているからである。また当系図によると、種元の子・小野種一は尊氏に仕えていたともある。

一方、種元のもうひとりの子・豊田光定の一流は、美濃国守護であった土岐頼康に仕えていたことが記されている。土岐氏は伊予国の荏原地方に所領を持っていたことが知られており[4]、種元の一流がまったく伊予とは縁がないというわけではないと言えるだろう。このように豊田二神氏との関係を直接示す史料ではないものの、なんらかの関係があるかもしれないという可能性は留保しているといえるのではないだろうか。

ところで、同史料の系図部分のあとには、明和五年（一七六八）の立政寺第四十世晧空上人による印証と、安政二年（一八五五）の第四十九世誠空上人による添証がある。印証・添証とは、この系図が正しいものであることを保証する添書のことである。この印証・添証から同系図の作成過程が窺える。

まず明和五年の印証によると、ある日、豊田甚四郎・同助右衛門が当山所有の豊田系図を写したいと申し出たため、豊田之系譜と豊田家の記録、そして五通の寄進状を并（なら）べ写させたとある。豊田甚四郎という人物は系図上に見られないが、豊田助右衛門とはこの印証

4．土岐氏が荏原地方に所領を持っていたのは、鎌倉時代まで遡ると考えられるが、史料的に確認できるのは、延文三年（一三五八）の土岐祐康が浄瑠璃寺に宛てた寄進状が初出である。土岐祐康（頼雄）は土岐頼康の弟であり、頼雄の子息である康行が頼康の養子となって美濃守護家の家督を継いでいる。その後、荏原にあった所領は守護家に相伝されたと考えられ、頼康の被官となった豊田種元の一流が、伊予と何らかの関係があったとしても不思議ではない。ただし直接、伊予との関わりを示すものではないことは留意する必要がある。土岐氏と荏原との関係については山内譲『伊予の地域史を歩く』（青葉図書、二〇〇〇年）の第二部第一章「赤蔵ヶ池のぬえ」に詳しい。

の一七年後の天明五年（一七八五）に亡くなっている人物のことであろう。甚四郎のほうが先に書かれていることから、おそらく甚四郎は本流にあたる人物ではないかと推測される。

次に安政二年の添証によると、光長（豊田為右衛門）の嫡子光平（豊田三十郎）が、立政寺にさまざまな寄進をしたことが書かれている。明確には書かれていないが、文脈から弘化二年（一八四五）に亡くなっている父光長の菩提を弔うための寄進だったと考えられる。

そして、系図の筆跡は豊田光平までは同一であり、光平の没年（明治二十一年）と戒名から筆跡が異なっている。以上のことから推測するに、光平の存命中、つまり添証が書かれた安政二年に、明和五年に写された系図のさらに写しとして作られ、その後数代分の続きが書き足されたものと思われる。この系図が立政寺側に残っているのは、立政寺側の写しとして作成されたからだろうか。

さて、今回、東京大学史料編纂所にある影写本を、立政寺の許可を得て複写させてもらったものを元に翻刻した。翻刻に際しては旧字は使用せず、すべて常用漢字に直した。また変体仮名もすべて現行の平仮名・片仮名を用いた。判断の難しい文字、文字全体は推測できるものの文字が半分欠けてような場合は、推定される文字を記入し、それを□で囲んでいる。

最後に、本系図の複写許可を与えてくださった立政寺には、この場を借りてお礼申し上げます。

# 豊田掃部助藤原種元之系図

大職冠鎌足公―不比等―房前―魚名―鷲取―藤嗣―高房―時長―利仁―叙用―吉信―忠頼―吉宗（従五位下始住于加賀国）―宗助―貞宗―貞光（加賀助号林介）―光家―光成（豊田五郎）―光広（豊田二郎）―光忠―光清（豊田弥三郎）

光房　豊田四郎　利房

光泰　豊田若狭守住于越前国

永徳元年辛酉年九月廿三日

直光院殿泰空法勇居士

菩提所

亀甲山立政寺

種元　豊田掃部助当国本巣郡祖父江住人

康安六年丁未父子相共寄附田園、代々相続　祖父江領主子孫在于今、凡至弘治年中

立政寺檀那

応永三丙子年三月三日

大種院殿元空法寛居士

豊田若狭守光泰

同掃部助種元

## 寄附状之写

奉寄進　立政寺智通能化

美濃国一橋庄内　高柳郷之

清数名内田成之畠此者地頭

名境東者西庄境

右奉寄進意趣者少分雖也、

立政寺智通能化随所望分、永

代奉寄進処実正也、若光泰

子々孫々代々至末世於此地至違乱

煩者長可致不孝人仍為後日

寄進状如件、

延文弐年丁酉十月七日

藤原光易（花押）

奉寄進　立政寺田地事

合肆段大者此内　壱段毘沙門堂　参段大立政寺

右田地者任先例依有志

奉寄進所也、於法勇子孫
不可有違乱煩者也、仍寄
進之状如件
永和二年壬七月日
法勇（花押）

奉寄進　立政寺智通能化
合堂　一宇
越前国豊田若狭守入道法勇
知行分さんさい名内の寺一処
美濃厚見郡平田西庄立政寺
智通能化奉寄進
右者御祈祷依被致精誠
寄進状如件
貞治六年丁未正月四日
種元（花押）

きしん申候

右、平田西庄種元知行分内
作橋壱段者種元がこしやう
おたいのため二なかくきしん
申候、後為之状如件、

永和五年三月日

種元判

平田西庄立政寺

奉寄進立政寺智通上人
美濃国厚見郡平田西之庄内
豊田掃部助種元知行分内
合参段者　坪中村畠二反
　　陀羅尼田壱反
右此所者為善忠（土岐頼康）禅門御幽
拝田、永奉寄進立政寺所也、
末代無懈怠毎日可被申御
訪者也、仍為後日状如件、

嘉慶弐年戊辰十二月十五日
掃部助種元

奉寄進　立政寺智
美濃国厚見郡平田
種元知行分内
合陸段大者（此内一反大立其坪）
右地者親父法勇為
後生、雖奉寄進、四段大
者、副弐反六段大悉未
所奉寄進也、種元
於子孫者可（ママ）不可致違乱
仍寄進状如件
永徳弐年己戌六月八日
豊田掃部助種

※この文書は下部の欠損しているものを写したか。（翻刻者注）

種一　小野五郎左衛門、尊氏将軍幕下　立政寺檀那

種佐

種光　小野彦太良

種忠　小野五良左衛門

種親　小野彦五良

種良　小野五良左衛門

種正　小野伝助

種孝　小野五良兵衛住于厚見郡藪田、子孫今在于藪田及北方長屋

種次　井上角右衛門、為井上加賀右ヱ門子改氏於井上、養父加賀右ヱ門、斉藤左近太夫道三之臣、住于席田郡春近、子孫今在于彼所、又以旧領之由子孫住祖父江

光定　豊田五郎左衛門

文明十一己亥九月廿八日

信光院殿定空法道居士

光行　豊田左京初勇西死去〆

月窓院玉光寛忠禅定門

大永五年乙酉八月二日

光頼　豊田八良左衛門尉

天正七己卯年七月二日

香林宗梅禅定門

光本　豊田五郎左衛門尉

慶長十八年癸丑八月二日

光徳院殿本空道西居士

光高　豊田右門

元和五年己未三月九日

法名　宋味

豊田甚兵衛
寛永六年己巳十月廿五日
法名　道祐

間市
孫左衛門
孫右衛門
久作
以上四人
甚兵衛子弟也

豊田三十郎
甚兵衛子息
寛永十癸酉正月十六日
法名　道浄

豊田市内
三十良弟也
正保三丙戌四月七日
法名　道明

豊田久太夫
市内子也

豊田市左衛門　同
寛文元辛丑三月十九日
法名　道意

豊田次郎兵衛　市左衛門子也
宝永四年丁亥二月廿九日
法名　道悦

豊田三十郎　次郎兵衛子也、初平七ト云
寛延元年戊辰九月九日
法名　浄祐

豊田助右衛門　光家　平七子也
天明五年己巳正月十八日
法名　道悦

**豊田広吉** 助右衛門子也
後助右衛門ト云
文化二乙丑年九月十一日
**法名　道可**

**豊田為右衛門　光長** 広吉子也
弘化二乙巳二月十五日
**法名　道為**

**豊田三十郎　光平**
明治二十一年子年六月九日
自然院光空照岳道平居士

豊田与市
明治二十四十月廿八日
法名　光与

豊田立尾

明治三十九年十一月十四日

法名 尼 立量

豊田貫道

印証

考当山之旧記、豊田若狭守藤原
光泰入道法勇者、越前国之住人
而、当国厚見郡西之庄一方之領主也、
其男種一・種元当山之古檀而、共寄
附田園、親子三人之寄附状存在于
九通、今種一以小野為氏、属尊氏
将軍、其末裔今在長屋村、種元属土
岐大膳太夫頼康、住于当国本巣郡
祖父江、代々其地之領主也、凡自
開山大士以至弘治年子孫相続当
山之大檀越也、今祖父江村之豊田甚四良

同助右衛門者正其末葉也、一日而願拝
写当山所伝古檀略譜中豊田之系
図、是以応其願、使并写当山所有豊
田之系譜与彼家之記録、以授与右
両人又使写光泰・種元之寄附状五通、
貽之先祖之由緒不可有疎略者
也

明和五年戊子之春二月
亀甲山立政寺第四十世
皎空叟誌

添証

豊田姓者藤原大職冠鎌足公後胤十八代
光成称豊田五郎、廿五代豊田若狭守光泰
嫡子掃部助種元共世就動乱退去越前
国、赴濃陽、属国司土岐太輔頼康、時建
武年中卜居同国本巣郡配領宦田興家

苗也、粤厚見郡高柳郷市橋庄立政寺開
山智通大士道徳響朝野、文和三年頃奉
詔天下安寧祈願、其修験昭々、依勅諚
一宇造立、近郷武士等造営戮力、其逸人
也、康安年已後寄附父子田園証券数通、
現在当山宝庫、雖為世動乱至弘治年中
大檀那也、及永禄慶長無干戈止目四姓浮沈
道俗漂白国史明々焉、又宗門改転応同千、
是誰人歎息之乎、爰当山四十代皎空上人
在職砌、豊田某甲（申力）自家伝来系譜、一軸携
来、当山庫秘諸家由緒系譜一巻以対校之、
猶符節合也、寔古先祖由緒審詳也、久
忘孝養嗚呼懺謝而已、一族既殖一村之
長先祖余光也、為追孝復師檀永代以
祠堂資糧例年九月廿三日正当忌辰而
営無遮大会備孝養者也、親父光長
性質朴扶育窮民陽報潤子孫、嫡子
光平継父遺跡守道独慎苦楽衆共
惻隠情厚帰依三密修造社塔破壊、其

功莫太也、則当山善光寺如来並諸尊等
又宮殿荘厳具跡追観音堂用材新造修覆
非其品三五、喜捨寄附巨細当山紀事書扯
者也、厭名利清浄厚志除筆点也、喟可謂
逸人乎、先祖暉威光修因感景克勉之云々、
粛云
維時安政二乙卯年霜月
亀甲山立政寺四十九世
誠空仙意識（印）

# 二神系譜研究会会則

**（名称及び事務局）**

第１条　本会の名称は二神系譜研究会とし、事務局を当分の間事務局長宅に置きます。

**（組織）**

第２条　本会は二神の姓を持つ方々及びその縁者並びに二神の歴史に関心のある方あるいは本会の目的に賛同する有志をもって組織します.

**（目的）**

第３条　本会は、二神氏の発祥、発展を経て、全国に拡がってきた二神の系譜を科学的に調査・研究するとともに、関係する他の研究グループとの交流を図り、また、会員相互の親睦を深めることを目的とします.

**（事業）**

第４条　本会は前条の目的を達成するため下記の事業を実施します。

1. 二神氏の系譜、歴史文化の調査・研究を行ないます.
2. 前項の結果を踏まえて会員等を対象に学習研究会、交流会等を適宜開催します。
3. 会報『海の民　ふたがみ』及び『二神系譜研究会速報』『事務局のうごき』を発行し、ホームページ「二神系譜研究会」を掲載します。
4. 他の氏族等の研究グループとの交流を図り、情報の交換を行ないます。
5. 資料の蒐集整理及び保管を行い、会員等の閲覧に供します。
6. 会員相互の親睦を図ります。
7. 必要な地域に支部を置き、支部会を開催します。
8. その他、本会の目的達成のため必要な事業を実施します。

**（役員）**

第５条　本会に下記の役員を置きます。

| | |
|---|---|
| 会長 | １名 |
| 副会長 | １名 |
| 事務局長 | １名 |
| 理事 | 若干名 |
| 常任理事 | 理事の中から数名 |
| 支部幹事 | 各地域毎に２～３名 |
| 監事 | ２名 |
| 顧問及び相談役 | 若干名 |

会長は会員中から総会において推挙します。他の役員は会長がこれを委嘱し総会に報告します。

**（役員の任務）**

第６条

1. 会長は本会を代表し、会務を統括します。
2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときは会長の職務を代行します。
3. 事務局長は本会の事務を遂行するとともに会計を担当します。
4. 理事、常任理事は本会の会務を掌理します。
5. 支部幹事は支部会の会務を処理します。
6. 監事は本会の会計を監査します。
7. 顧問及び相談役は本会の事業に適宜指導・助言を行ないます。

（**役員の任期**）

第７条　　役員の任期は２年とし、再任を妨げません。

（**役員会**）

第８条

1. 理事会　　年数回開催し、本会の企画運営について協議します。
2. 常任理事会　事務局近辺の地域の理事によって組織し、会長を扶けて事業の推進にあたるとともに会報の作成を担当します。

（**総会**）

第９条　　本会の事業を総括するため、総会を開催します。

1. 総会では、下記の事項を審議・決定します。
   （1）年間の事業報告及び事業計画の決定。
   （2）1 年間の会計報告、会計監査報告及び予算計画。
   （3）役員の改選
   （4）会則の変更
   （5）その他会務の遂行に必要な重要事項
2. 総会は原則として毎年４月に開催します。
3. その他、会長は必要に応じて臨時の総会を召集することができます。
4. 止むを得ない事情が発生した場合は、書面総会を開催することができる。

（**会計**）

第 10 条

1. 本会の会計は、会費及び寄付金をもってあてます。
2. 会費は年間一口 5，000 円とし、一口以上納入するものとします。
3. 特別な事業を行なう場合は、寄付金を募集し、特別会計によって処理します。
4. 会計年度は４月１日から翌年３月 31 日までとします。

**【改正履歴】**

1. ２０００年３月１２日・会則制定
2. ２００９年５月１０日・第７条（役員の任期）第１０条２項（会費）改訂
3. ２０１１年４月１７日・第５条（役員）第６条（役員の任務）第８条（役員会）改訂
4. ２０１２年４月１５日・第４条（事業）改訂「事務局のうごき」を追加する
5. ２０１５年４月１１日・第６条（役員の任務）改訂
6. ２０１６年７月１５日・第５条　関連「特別調査研究班の設置」と会長による委員委嘱
7. ２０１８年４月２８日　・第９条　（ 総会 )4 項（書面総会）を追加する

# 二神系譜研究会役員名簿

| 役職名 | 氏名 | 担当・エリア | 出身系譜 |
|---|---|---|---|
| 会　　長 | 二神　俊一 | 総括 | 畑中二神氏 |
| 副会長 | 二神倫一郎 | 組織 | 本島二神氏 |
| 相談役 | 二神チヲリ | ー | 畑中二神氏 |
| 事務局長 | 二神　英臣 | 企画 | 小川二神氏 |
| 常任理事 | 二神興三郎 | 渉外 | 土居二神氏 |
| 常任理事 | 二神　重則 | 組織 | 吉木二神氏 |
| 常任理事 | 豊田　　渉 | 調査 | 豊田氏 |
| 常任理事 | 峰岡　秀和 | 調査 | 峰岡氏 |
| 常任理事 | 二神美知子 | 会計・広報 | 余戸二神氏 |
| 監　　事 | 二神　良昌 | 財務 | 吉木二神氏 |
| 監　　事 | 二神　裕寿 | 財務 | 本島二神氏 |
| 理　　事 | 二神　友和 | | 小川二神氏 |
| 理　　事 | 二神千恵子 | | 小坂二神氏 |
| 理　　事 | 二神　康郎 | 関東支部 | 港山二神氏 |
| 理　　事 | 二神　宏介 | 関西支部 | 松山二神氏 |
| 理　　事 | 二神　久蔵 | 関西支部 | 城辺二神氏 |
| 理　　事 | 東倉　和賢 | 関東支部 | 本島二神氏 |
| 理　　事 | 二神　　守 | 関西支部 | 道後二神氏 |
| 理　　事 | 二神　　勇 | 九州・西部 | 東予二神氏 |
| 理　　事 | 二神　信也 | 関西支部 | 松山二神氏 |
| 理　　事 | 二神　元信 | 関東支部 | 松山二神氏 |
| 理　　事 | 二神　国廣 | 四国支部 | 一本松二神氏 |
| 理　　事 | 二神　光次 | 九州・西部 | 余戸二神氏 |
| 理　　事 | 二神　英輔 | 四国支部 | 一本松二神氏 |
| 理　　事 | 二神　延平 | 関東支部 | 城辺二神氏 |
| | | | |

# 編集後記

当会も早いもので創立 20 周年。この間、会員の皆さまはじめ関係者の並々ならぬご努力のおかげで今日を迎えましたが、役員の方々も高齢化し、加えてコロナ禍に翻弄され、柱となっていた役員が健康上の理由で退会されるなど、従来と同じような活動がだんだんとできなくなってきました。本冊子は第 19 号ということでこれまでの歩みなどについて特集させていただきましたが、お知らせするのが遅くなり皆さまにご迷惑をおかけし、申し訳ございません。そこは発行編集長の豊田渉常任理事の熱意と実行力で何とか発刊に漕ぎつけることができました。ありがとうございました。

また、懸案事項でありました当研究会のホームページも、二神重則常任理事および二神美知子常任理事の斬新なアイデアと執念で鋭意リニューアルもできました。さらに隔月発刊の「事務局のうごき」は二神英臣事務局長の精力的なパワーで継続ができています。脳梗塞のハンデイを乗り越えてカムバックし地道な活動に深く敬意と感謝を表したいと思います。

**さて、次号第 20 号は、「創立 20 周年特集号」として 2022 年 3 月末発刊をめざし、準備期間を入れたら 20 数年間になりますが、その間の歩みや今後の展望、また故二神浩三元会長はじめ物故者への想い出など、これまでの集大成を目指したものにしたいと思います。**

**皆様方の多くのご寄稿を切にお願い申し上げます。**

令和元年（2021 年）3 月 25 日

会長　　二神俊一

# 編集後記

１年８か月ぶりに今回の第１９号を発行することが出来た。コロナ禍を理由に遅れたわけではないが、今までのようには事が進まない状況にあることは否めない。当会も発足２０年を過ぎたが、どこの組織でも同じように会員の減少や高齢化に伴い活動自体が厳しい状況に置かれている。思いだけでは難しいのかもしれないが、思いを持ってあたらなければどうにもならない。始めることと終えることは誰でもできるが、続けていくことは誰でもはできないということなのだろう。

令和２年（2020）はコロナに始まりコロナに終わった。簡単に収束・終息する気配は見られず、まだまだ道は遠いように思われる。多くのことが制限され生活が一変した。学校は休校を余儀なくされたし、多くのイベントは中止になった。東京オリンピックは今年に延期になったが、不安要素は拭えない。経済活動への影響は大きいものがある。ワクチンは開発されたが接種への不安もある。人々の行動を完全にシャットアウトすることはできず、課題は多いようである。

当会においても活動の制限・変更はせざるを得ない状況にあった。総会は書面総会にさせていただき、5年毎の４月に参加していた山口県豊田町での「豊田氏慰霊五年祭」も実施されなかった。なかなか厳しいものがあるが、できることから少しずつでも頑張っていきたいと思う。

来年のことを言うと鬼が笑うかもしれないが、次の「海の民ふたがみ」２０号は、令和４年（2022)3月までに発行する予定。ここに早々と周知させていただき、会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

豊田　渉

# 二神系譜研究会
# 「海の民ふたがみ」第 18 号

発行日　令和 3 年（2021 年）3 月 31 日

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇　二神系譜研究会への連絡先　◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

会長
二神　俊一　〒 791-0243 松山市平井町 3020
TEL・FAX：089-975-1650
Email：shunichi@futagami.se

事務局長
二神　英臣　〒 799-2469 松山市光洋台 7-34
TEL・FAX：089-994-2542
Email：ogawatakuwami@yahoo.co.jp

広報
二神　重則　〒 791-0243 松山市平井町甲 2169-43
TEL・FAX：089-976-5179
Email：westengehen@tempo.ocn.ne.jp

冊子編集委員長
豊田　渉　〒 791-1101 松山市久米窪田町 400-9
TEL：089-970-6140
Email：wakkun492@leo.e-catv.ne.jp

二神系譜研究会
URL：http://www.rootsfutagami.org/

編集・印刷
ネクサス愛媛　TEL：070-5514-2701
Email：nxsehime@gmail.com
URL：http://nxsehime.jp/

表紙の写真・・・愛媛県伊予郡松前町の塩屋海岸から北西方向約２０km にある二神島。この左手には由利島、右手には興居島がある。江戸時代に松前浜村漁師の由利島進出の問題があった。